

### ■太宰府市民遺産とは

市民が「未来の太宰府に伝えたい」と思う太宰府固有の物語と、関連する文化遺産、そして物語を伝える活動（育成活動）とを合わせて『太宰府市民遺産』といいます。

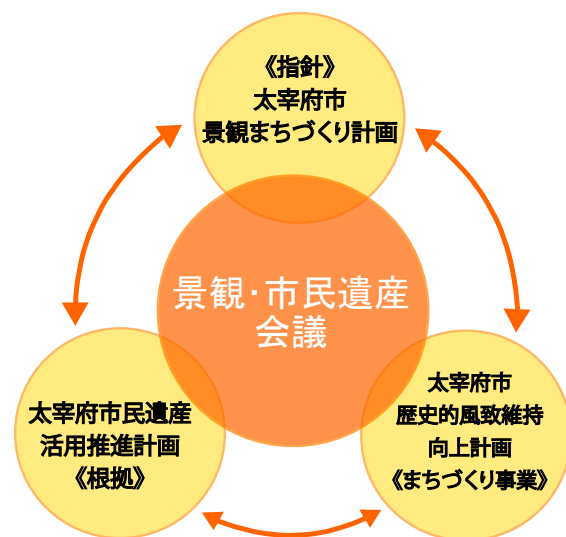
### ■太宰府の景観と市民遺産を守り育てる取り組み

市では、平成22年に「太宰府の景観と市民遺産を守り育てる条例」を設け、景観計画に基づく地域の良い景観形成と、市民主体で地域のたからを守り伝える活動を行政・市民・事業者の三者協働で支えるしくみ「太宰府市民遺産」の取り組みを進めています。

「景観・市民遺産会議」は、市民・行政・事業者の三者で構成される協働組織で、会議に提案され、認定された太宰府市民遺産は、これまで12件になります。

### ■景観・市民遺産会議の構成メンバー

太宰府観光協会、太宰府市自治協議会、太宰府天満宮、商工会（観光・商業・工業）、有識者、太宰府市（都市整備部・教育部）、景観・市民遺産育成団体



### ■太宰府市民遺産認定に関する指標

太宰府市民遺産は、景観・市民遺産会議の納得をもって認定されます。納得のための目安として、以下の指標が設定されています。

- ①伝えたい太宰府固有の物語である
- ②物語が文化遺産で構成されている
- ③文化遺産を守り育てる活動である

- 主催 / 太宰府市景観・市民遺産会議、太宰府市、太宰府市教育委員会
- 問い合わせ先 / 太宰府市景観・市民遺産会議事務局（太宰府市教育委員会文化財課）  
太宰府市都市整備部都市計画課  
〒818-0198 太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
TEL 092-921-2121 内線 472（文化財課）・424（都市計画課）  
景観・市民遺産会議 HP <http://www.市民遺産.jp/>

## 第8回

# 太宰府市景観・市民遺産会議

平成30年2月3日（土）

## 《プログラム》

- 13:00 開式
- 《第1部》 だざいふ景観賞
- 13:05 第4回 だざいふ景観賞表彰式
- 《第2部》 太宰府市景観・市民遺産会議
- 13:40 太宰府市民遺産とは？  
太宰府市景観・市民遺産会議事務局より
- 14:05 太宰府市民遺産候補の提案・審議・認定採決  
市民遺産候補：「太宰府をうたう♪全11曲（作曲・唄 岩崎記代子）」  
提案団体：岩崎記代子と「赤い鳥」と「夢みらい」  
〈休憩〉
- 15:15 太宰府市民遺産活動発表  
報告団体：大宰府万葉会
- 15:40 授与式（認定された場合のみ）
- 16:00 終了

※タイムスケジュールは、当日の進行状況によって変更になる場合があります。

# 『太宰府をうたう』全11曲 (作曲・唄 岩崎記代子)』

提案団体：岩崎記代子と「赤い鳥」と「夢みらい」

## 【伝えたい物語】

岩崎記代子さんは、太宰府市在住の作曲家・声楽家で、日本童謡協会会員、福岡文化連盟会員でもあり、「日本の作曲家」「日本の演奏家」人名事典に掲載されています。また、大分玖珠町メルヘン大使、八女市観光大使にも任命され、平成29年には太宰府市民文化賞を受賞されました。

岩崎記代子さんが太宰府をテーマに作曲して唄うきっかけとなったのが、戒壇院復興活動です。平成5年に詩人で俳人の平山芳江氏の声かけで、戒壇院復興の募金活動をしようということになり、歌があった方が募金活動を進めるのに世間に解り易いだろうということで、♪寂光に佇ちて♪という詞を頂き、曲を制作されたのが最初です。新聞各社、テレビニュース、他方面でのメディアにとり上げられ募金活動は順調に進んだ経緯があります。そして、太宰府に魅力を感じた岩崎さんは、本格的に太宰府をテーマとした作品を創るため、平成12年に観世音寺に居を移し現在に至っています。

太宰府をうたった♪寂光に佇ちて♪(平成5年作)から♪道真公♪(平成20年作)までの全11曲は、太宰府の風土に魅せられた作詞家たちの詞に、岩崎さんの曲と歌声をのせることで作品ができあがっています。

岩崎さんいわく「太宰府は、様々な“音”に満ち溢れている」とのことです。政府跡に立てば、古代からの幾多の思いが、また、太宰府天満宮や榎社に立てば、天神さまの思いが、岩崎さんをかりたて、湧き出した音により、作品が創り出されています。岩崎さんが創り出した“音”には、太宰府の四季のような様々な“色”があり、11曲に語られている太宰府の歴史や風景が、聴く人の体に自然に溶け込むものとなり、太宰府に馴染みがない人たちにも聞きやすいメロディとなっています。また、その音色の奥には、強い魂を感じる事ができ、それからにじみ出る品格や人柄が、さらに聴衆を魅了するものとなっています。

この11曲は、完成後多くのコンサートや公演、講座の中でうたいつづけられています。そして、聴衆に感動を与え、年月と共に作品そのものが実績を積み重ね、さらに大きな力を持つようになりました。このように愛され歌い継がれる“音”は、太宰府の深い歴史を伝え、太宰府の魅力を発信する力となり、さらに聴く人たちに大きな力を与えるものとなっています。



## 「遣新羅使悲別」の歌語り

万葉集には遣新羅使の歌が百四十五首歌われている。天平七(七三五)年、新羅から来朝した使者は、国名を「王城国」に改称したことを告げた。新羅を従属国とみていた朝廷は無断改称を責め、その使者を追い返した。翌年、阿倍継麻呂らは問責の使いとして難波港を出発した。しかし、途中佐婆海(山口県防府沖)で台風にあい、分間(大分県中津沖)まで漂流、その後筑紫館に到着し、各々故郷の妻を偲び歌をよむ。筑紫館を出発した一行は、壹岐島に至ったが、雪宅麻呂は疫病で亡くなった。さらに荒海を渡り新羅へ到着した。新羅で阿倍継麻呂一行は冷遇され追い返された。帰路対馬では阿倍継麻呂が疫病で亡くなった。一行は筑紫を経由し都に帰り着いた。疫病により遅れて帰朝した副使大伴三中は、遣新羅使の使者たちが歌った旅の様々な深い悲しみを歌日記のように整理したと推測される。それは大伴家持によって「秋・妻」をテーマとした「万葉集巻十五」に収録され、百四十五首を現在に伝えている。

今回は『続日本紀』を参考に『万葉集』の奥深い背景を、「歌語り」としてまとめてみました。

① 君が行く海辺の宿に霧立たば 我が立ち嘆く息と知りませ (巻十五―三五八〇)

② 秋さらば相見むものを なにしかも霧に立つべく嘆きしまさむ (三五八一)

③ はろはろに思はゆるかも 然れども異しき心を我が思はなくに (三五八八)

④ 大君の命かしこみ 大船の行きのまにまに宿りするかも (巻十五―三五八四)

⑤ 鴨じもの浮き寝をすれば 蜷の腸か黒き髪に露を置きにける (三六四九)

佐婆の海中に忽ちに逆風に遭ひ、深浪に漂流す。経宿して後、幸に順風を得、豊前国下毛郡の分間の浦に到り着き。ここに艱難を追ひ怛み、懐惆して作りし歌

大君の仰せを承って、大船の進み行くのに任せて仮寝の宿りをする事だ。

まるで鴨のように浮き寝をしていると、(蜷の腸)黒い髪に露が降りている。



【物語の基礎となる文化遺産】

岩崎記代子さんが作曲された太宰府の歌 11 曲

- |            |                 |                       |
|------------|-----------------|-----------------------|
| “ 寂光に佇ちて ” | “ 夢しのぶ ”        | “ 観世音寺を訪ねて ”          |
| “ 菅公様 ”    | “ 雪と雷さま ”       | “ 藍染川物語 ”             |
| “ 都府楼址 ”   | “ 天神さまの 12 ヲ月 ” |                       |
| “ 雪の観世音寺 ” | “ 道真公 ”         | “ 風は友達 - 太宰府バージョン - ” |

【育成活動】

- ・太宰府市内外で、福祉・慰問・芸術祭・生涯学習などのコンサートの中で、地域貢献のために太宰府の歌を広め、太宰府の魅力を発信し続ける。
- ・岩崎記代子記念館で演奏し、見学者へ伝え続ける。
- ・岩崎記代子と「赤い鳥」と「夢みらい」の総勢 120 名で歌を伝えつづける。

『太宰府をうたう♪全 11 曲』

● 寂光に佇ちて

作詞：平山芳江  
作曲：岩崎記代子

筑紫野の緑豊かに  
今も尚 まほろばの里  
観世音寺の鐘の音は  
その音 遠の朝廷と  
栄えたる歴史を刻む  
青き踏み万葉人の跡を辿りて  
寺苑の西 戒壇院を訪う  
星霜を経て 朽ちし草堂に  
疾風まで襲いて  
いよよ崩えすすむ 三戒壇の一つ  
厳しき戒律に耐え  
受戒成る学僧の涙は  
荒れしこの戒壇に染み  
木々を渡る風は声明と  
掌を合わす南無観世音  
願わくば 復興の槌の音  
春草萌ゆる 寂光土に  
高く 高く あれ

● 夢しのぶ

作詞：真はじめ  
作曲：岩崎記代子

天満宮の 仲見世通り  
松屋 松ヶ枝 月淡く  
国を憂いて 身をしのぶ  
僧月照と 志士たちが  
残せし筆蹟に 夢しのぶ  
言の葉の 花をあるじに旅ねする  
この松かげを 千代もわすれじ  
千歳語る 樟木立  
俱に天衝く 大鳥居  
とかく浮世の 恋うわさ  
九州男児 かくありと  
耐え立つ雄姿 空青し  
そよ吹く東風に 誘われる  
お石が茶屋の 軒に舞う  
人を愛して 愛されし  
面影映す 梅の花  
恋しや お石 春がゆく  
太宰府の お石の茶やに もちくえば  
旅の愁ひも いつかわすれむ

筑紫の館に至り、遙かに本郷を望みて凄愴して作りし歌

⑥ 志賀の海人の一日も落ちず焼く塩の 辛き恋をも我はするかも (三六五二)

⑦ 可之布江に鶴鳴き渡る 志賀の浦に沖つ白波立ちし来らしも (三六五四)

⑧ 今よりは秋づきぬらし あしひきの山松陰にひぐらし鳴きぬ (三六五五)

⑨ 神さぶる荒津の崎に寄する波 間なくや妹に恋ひわたりなむ 土師稻足 (三六六〇)

⑩ 石田野に宿りする君 家人のいづらと我を問はばいかに言はむ (三六八九)

⑪ 世の中は常かくのみと別れぬる 君にやもとな我が恋ひ行かむ (三六九〇)

⑫ 新羅へか家にか帰る 壱岐の島行かむたときも思ひかねつも 六鯖 (三六九六)

⑬ 新羅へ向かおうか、家に帰ろうか。(壱岐の島) 行く手だてさえ見当がつかない。

⑭ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。

⑮ 新羅へ向かおうか、家に帰ろうか。(壱岐の島) 行く手だてさえ見当がつかない。

⑯ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。

⑰ 新羅へ向かおうか、家に帰ろうか。(壱岐の島) 行く手だてさえ見当がつかない。

⑱ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。

⑲ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。

⑳ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。

㉑ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。

㉒ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。

㉓ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。

㉔ 世の中はいつもこのように無常なものだと別れ去ってしまったあなたに、いたずらに恋い慕いながら私は行くことだろうか。



## 観世音寺をたずねて

作詞：村上寿浩  
作曲：岩崎記代子

まほろばの道に  
観世音寺をたずねました  
春の陽はいとしげに  
古刹のいらか 花の風  
しだれ桜は うつくしく  
御ほとけの影 よりそって  
私はたち止まって  
しばらく 夢でも  
みたのでしょうか  
聞こえてきたのは 鐘の音  
ゆめみたものは はるかなるもの  
筑紫の国は  
観世音寺をたずねました  
秋の陽はひっそりと  
四王寺山は うららかに  
落ち葉しく 境内に  
御ほとけがいて 私がいて  
私はたち止まって  
遠い日のことなど  
想っていました  
聞こえてきたのは 鐘の音  
ゆめみたものは 天平のころ

## 菅公様

作詞：岡崎ふくみ  
作曲：岩崎記代子

天空を見上げれば 九重の杉木立  
苔むす石段を 上がれば  
古への都人 菅公様の仮寝の神座  
無念の涙よ霧となれ  
心行かしく 願って集う  
笛に太鼓に 舞う踊り  
民の寵の 優しさに守られて  
しばし安堵の 観月の宴  
賜る他名 ここは菅原の里

## 雪と雷さま

作詞：平山芳江  
作曲：岩崎記代子

雷さまに 起こされて  
冬の約束 思い出す  
残らず雪を 降らすこと  
ツバメが来ぬうち 今のうち  
仲間を呼んで いっぺんに  
綿雪 小雪 ぼたん雪  
雷さまに 起こされて  
ふくらみかけた 花の芽が  
出ようと待ってた 虫達が  
びっくり仰天 逆もどり  
今日は一日 春の雪  
とけてはつもる 忘れ雪

## 藍染川物語

作詞：岡崎ふくみ  
作曲：岩崎記代子

凍りつくよな 比叡の風  
梅のつぼみも 耐える京の街  
愛しい貴君は 遠の朝廷へ帰る方  
忘れ形見の 梅千代を  
腕に抱きしめ 見上げる東雲は  
恋路に染まる 色重ね  
筑紫まほろば 太宰府想う  
西の彼方の 梅の縁里  
恋しい貴君を 追って慕って飛べるなら  
梅の小枝に 身を託す  
逢いたい道のり 百と五十余里  
藍染川で 袖ぬらす  
心情届かぬ 澤標  
幼子残して 罪の襖川  
梅壺の女御 愛の証と身を投げる  
泣いて母呼ぶ 梅千代の  
祈りが叶った 藍染川原には  
天神様の 慈悲の愛

## 都府楼址

作詞：村上寿浩  
作曲：岩崎記代子

都府楼に たたずめば  
礎は 土に埋もれて  
旅人は めぐるまぼろし  
朱の柱 朱の回廊  
はるかなる 遠の朝廷(みかど)を  
都府楼に まどろみて  
遠き代の 夢にさすらう  
旅人の 胸をながれる  
万葉の 歌のしらべに  
しのばれる 筑紫歌壇を  
都府楼は うららかに  
大野山 雲に影ゆき  
旅人に 草はうるわし  
丘の辺に 花は香りて  
宝満は 遠くかげろう

## 天神さまの12ヵ月

作詞：村上寿浩  
作曲：岩崎記代子

天神様の お正月  
ウソ替え鬼すべ 初詣  
太鼓橋には 人の波  
天神様に 東風吹かば  
飛梅の歌 なつかしく  
白紅梅と 咲き満ちる  
天神様の 梅の下  
曲水の宴 歌を詠む  
平安朝の 雅やか  
天神様に お兄ちゃん  
試験合格 神頼み  
学生服の しおらしさ  
天神様の 心字池  
朱(あけ)の楼門 楠若葉  
映す青空 眼にしみる  
天神様の 花菖蒲  
菖蒲の池に 咲き競う  
紫の花 白い花  
天神様の 夏祭り  
夏の健康 祈願して  
夜は幻想 千灯明  
天神様の 御土産は  
木彫りのウソに 茶店みな  
梅ヶ枝餅と 呼んでいる  
天神様の 御神幸  
王朝絵巻 筑紫路に  
秋を彩る 花車  
天神様の 秋思祭  
詩歌の調べ 篝火に  
菅公偲ぶ 虫の声  
天神様の 七五三  
菊花香りて 幼子の  
晴れ着姿の あいらしさ  
天神様の おしまいは  
今年たまった すすはらい  
新年迎える 忙しさ

## 風は友達 —太宰府バージョン—

作詞：平山芳江  
作曲：岩崎記代子

遙かに連なる 水城の跡に  
歴史は語る 遠の朝廷と  
道真公の 悲運に泣けば  
鐘の余韻に 心静けさ  
風は友達 私の友達  
悲願百年 胸張る誇り  
九州国立 博物館に  
途絶えぬ人波 合格絵馬と  
拍手打つ手に 飛梅香る  
風は友達 僕の友達  
宰府の宮の 鳥居をくぐりて  
仲店通りの 賑い焼餅  
人垣えらんで お土産両の手  
家路を目指して 電車の窓辺  
風は友達 みんな友達

## 雪の観世音寺

作詞：舟木楓秋  
作曲：岩崎記代子

いにしえ人の 夢偲ぶ  
遠の朝廷を 垣間見る  
天智天皇 発願の  
観世音寺の 境内に  
いつとは止まぬ 雪の花  
釈迦さま縁 菩提樹も  
春を待ちての 雪のなか  
歴史みつめた 鐘楼に  
白い静寂 しんしんと  
おもむきみせる 細雪  
下野薬師 東大寺  
この地太宰府 またひとつ  
三戒壇の 在りしとこ  
人のこころを 戒めて  
清らになれと 諭す雪

## 道真公

作詞：岡崎ふくみ  
作曲：岩崎記代子

仰ぎみる 天拝山の峰に登り  
真実よ 天に届けと  
祈りし 道真公は  
啼く雷に 身を委ねる  
淡雪が 舞うのを見て  
謫居の 庭にも  
梅の香りと 懐かしむ  
観世音寺の 鐘の音を聴き  
京の都の 栄華を偲ぶ  
恩賜の御衣は 今ここに  
都府楼と 名づけし道真公は  
神となり 甦る  
宰府の里の 弥栄を微笑む